

研究テーマ

当院回復期リハビリテーション病棟入院患者における栄養状態と入院期間の関連性の検証

病 院 名

医療法人社団健育会 石巻健育会病院

研 究 者

○^{えんどう なおき}遠藤巨樹(作業療法士) 荻原久佳(理学療法士) 小野寺泰弘(作業療法士)

概 要

【研究背景】

当院回復期病棟において、栄養状態の改善が必要とされる患者が多く見られ、先行研究では回復期病棟入院患者33名中27名が低栄養患者、24名がサルコペニア患者と報告されている。¹⁾過去の研究では栄養状態とADLの関連については多く報告されているが、栄養状態と入院期間の関連について報告された研究は少ない。そこで当院回復期病棟入院患者の栄養状態について調査し、入院期間との関連性について検証した。

【研究目的】

当院回復期病棟入院患者におけるNST対象者とサルコペニアの割合を明らかにし、入院期間との関連性について検証する。また、栄養状態の改善に関して今後リハビリテーション科と栄養科との協力体制を整えるための資料とする。

【研究方法】

当院回復期病棟へ入院した65歳以上の患者96名を対象とした。包含基準はR3.1月～9月の間に回復期病棟へ入院し、かつ退院した患者。除外基準は急性増悪による転院、他病棟への転棟、死亡退院、データ不備等により欠損値のある患者。NST群(以下A群)、サルコペニア群(以下B群)、A、B以外の対象者をC群に分類し、3群間の平均入院期間を比較検討した。A群は当院NSTマニュアルに準じて介入対象と判断された者、B群はAWGS(2014)の操作的定義²⁾に該当する者。統計処理はKruskal-Wallis検定を行い、有意差が出た場合に多重比較検定を用いた。有意水準を5%とし、統計解析ソフトは改変R commander 4.02 for Windowsを用いた。本研究は当院倫理委員会の了承を得ている。

【結果】

平均入院日数はA群、94.9±42.7日(23名、24%)、B群、81.8±39.3日(37名、39%)、C群、72.4±30.6日(36名、37%)となり、有意差は認められなかった($p=0.059$)。握力及び、SMIは、Kruskal-Wallis検定の結果有意差を認めたため($p<0.01$)、多重比較検定を行った。その結果、握力(kg)はA群vsC群及び、B群vsC群ともに有意($p<0.01$)にC群で高く、SMI(kg/m^2)はA群vsC群では有意($p<0.05$)にC群で高く、B群vsC群では、有意($p<0.01$)にC群で高い結果となった。

【考察】

その他群と比較してNST群、サルコペニア群は入院期間の平均値は延長していた。入院期間に関わる要因は様々であり、断定はできないが栄養障害は入院期間の延長に影響を及ぼす可能性があり、サンプル数を増やし継続して調査する必要がある。NST群を除いたサルコペニア群は全体の39%を占めており、栄養改善を図るためにリハビリテーション科と栄養科の協力体制の構築が必要である。

【結論】

栄養障害は入院期間の延長に影響している可能性があり、チームが連携して栄養改善に取り組む必要がある。

【引用参考文献】

- 1) 吉田貞夫:回復期リハビリテーション病棟に入院する高齢者の栄養状態とアウトカム. 静脈経腸栄養. Vol.28: No.5: 2013; pp27(1051)-31(1056).
- 2) 吉村芳弘, 山鹿眞則男, 古閑弘明:サルコペニア診療ガイドライン2017とリハビリテーション. Jpn J Rehabil Med. Vol.55: No.5: 2018; 410-417.